

# 【漁況】

## [マアジ]

### 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマアジの漁獲量は、昭和40年の53万トン进行ピークに減少傾向となり、昭和55年には5万4千トンとなりました。

その後増加傾向に転じ、平成8年には33万トンに増加し、平成10年までは30トン台で推移しましたが、再び減少傾向に転じ、平成18年は16万7千トンとなりました。

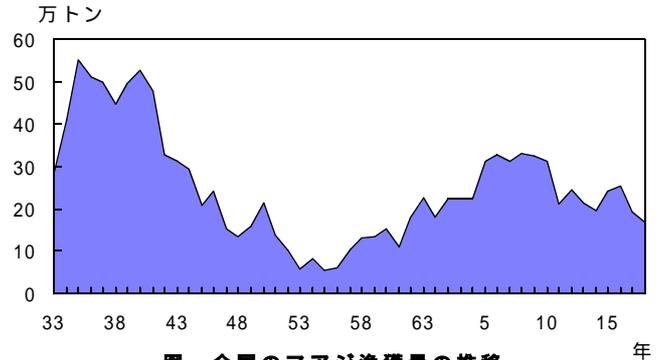


図 全国のマアジ漁獲量の推移

### 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甑島東から串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、枕崎沖から野間岬沖に漁場が形成されました。

4港計のまき網では、マアジ仔（0歳魚：平成20年生まれ）主体に1,543トンの水揚げで、前年の532%及び平年の253%と非常に好調に推移しました。

### 3. 平成20年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マアジ仔、マアジ豆（0歳魚：平成20年生まれ）で、マアジ小・中（1歳魚以上）も漁獲されるでしょう。

来遊量は、前年・平年を上回るでしょう。

（根拠）

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

漁獲主体となるマアジ0歳魚は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年・平年を上回ると考えられます。マアジ1歳魚以上は、現在までのまき網での漁獲状況から、前年並みで平年を下回ると考えられます。

総合的に判断すると、前年・平年を上回ると考えられます。

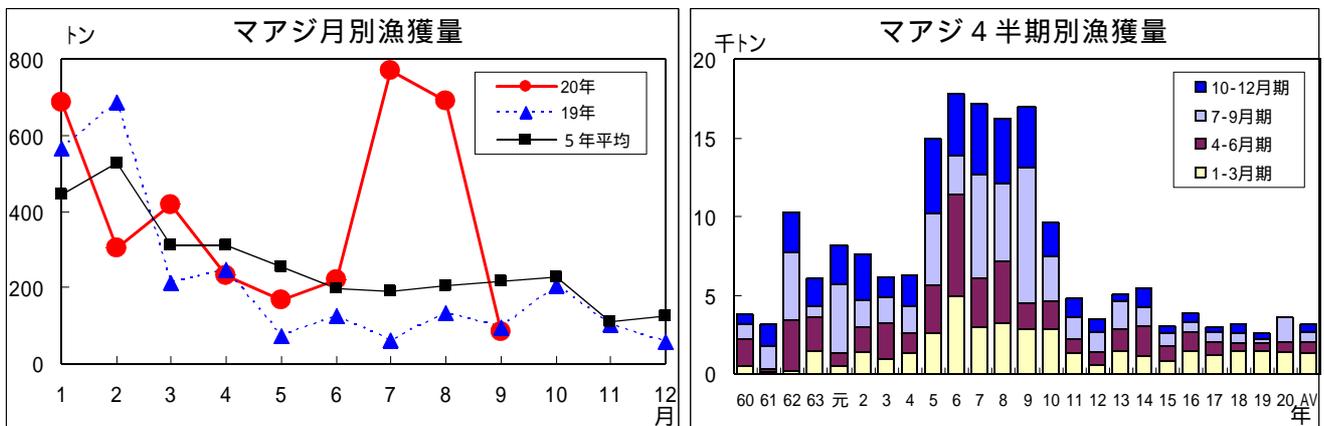


図 マアジまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，9月は平成20年9月17日までの水揚量を使用。

# [ サバ類 ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

サバ類の漁獲量は、昭和53年の160万トンにピークにマサバ資源水準の低下により年々減少し、昭和57年には72万トンとなりました。その後は、ゴマサバの増加により大幅な漁獲量の減少は見られませんでした。昭和63年以降はゴマサバの資源水準も低下したため、サバ類の漁獲量は大きく減少し、平成3年には26万トンとなりました。平成5年から増加に転じ平成9年には84万9千トンまで増加しましたが、その後減少し平成14年は27万9千トンとなりました。平成17年から再び増加し平成18年には65万2千トンとなりました。

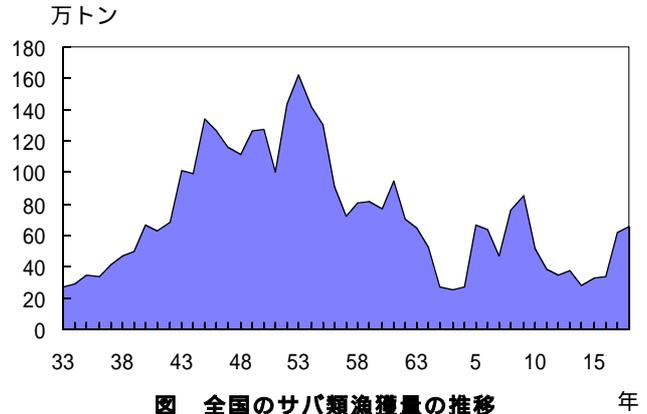


図 全国のサバ類漁獲量の推移

## 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

### 【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

北薩海域では、甕島東から串木野沖に漁場が形成されました。

薩南海域では、種子島東，野間池沖，湯瀬，宇治群島に漁場が形成されました。

4港計では、ゴマサバ豆(0・1歳魚：平成20年生まれ・平成19年生まれ)主体に4,852トンの水揚げで、前年の177%及び平年の100%となりました。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、ゴマサバ豆・小(0・1歳魚：平成20年生まれ・平成19年生まれ)となるでしょう。

来遊量は前年・平年を上回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

ゴマサバ0歳魚は、1歳魚に混じりまき網で漁獲されていることから、前年を上回る来遊が期待されます。ゴマサバ1歳魚は、現在の漁獲の主体となっていて、隣県においても同サイズが好調に漁獲されていることから、今後も前年・平年を上回る来遊があると考えられます。3歳魚以上は散発的な来遊になると考えられます。

総合的に判断して、前年・平年を上回ると考えられます。

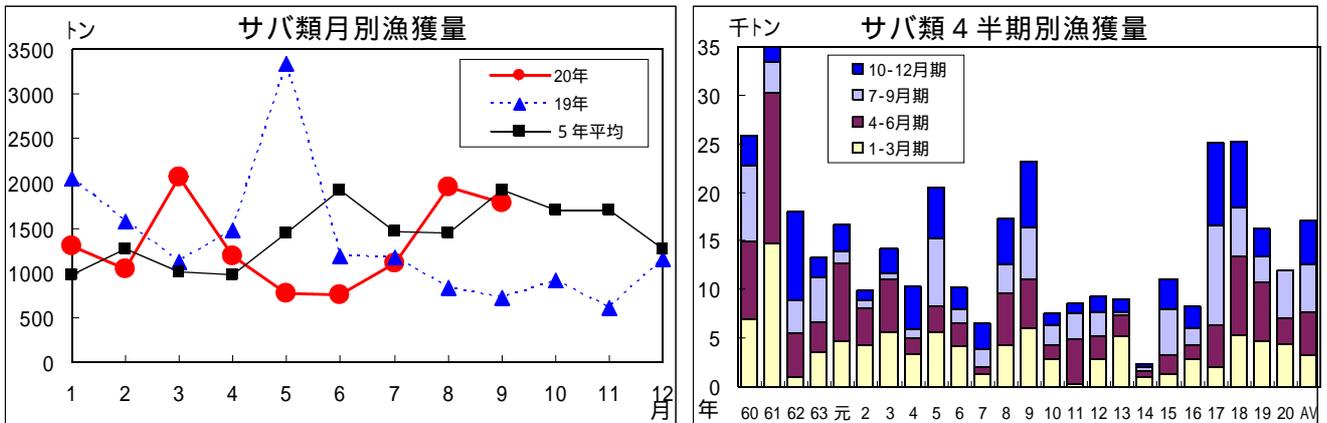


図 サバ類まき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年(平成15～19年)の平均値，9月は平成20年9月17日までの水揚げ量を使用。

# [ マルアジ (アオアジ) ]

## 1. 漁獲量の動向

マルアジの漁獲量は、昭和62年から平成元年に1,500トンを超えるピークがあり、その後低調に推移し、平成12年から15年に再度ピークを迎え15年には3,150トンと最高を記録しました。平成16年以降は低調に推移し、19年は654トンとなりました。

## 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

北薩海域で散発的な漁獲があり、期全体で58トンの水揚げで、前年の100%及び平年の66%でした。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、マルアジ小(1歳魚：平成19年生まれ)、マルアジ中・大(2歳魚以上)でしょう。

来遊量は前年並みで平年を下回るでしょう。

(根拠)

漁獲の主体は、近年の漁獲パターンや現在の漁況経過から予測しました。

マルアジ小(1歳魚)は、前期までの漁況経過から、来遊量は前年並みで平年を下回る水準です。マルアジ中・大(2歳魚以上)の来遊量は、前年・平年を下回る水準です。

総合的に判断して、前年並みで平年を下回ると考えられます。

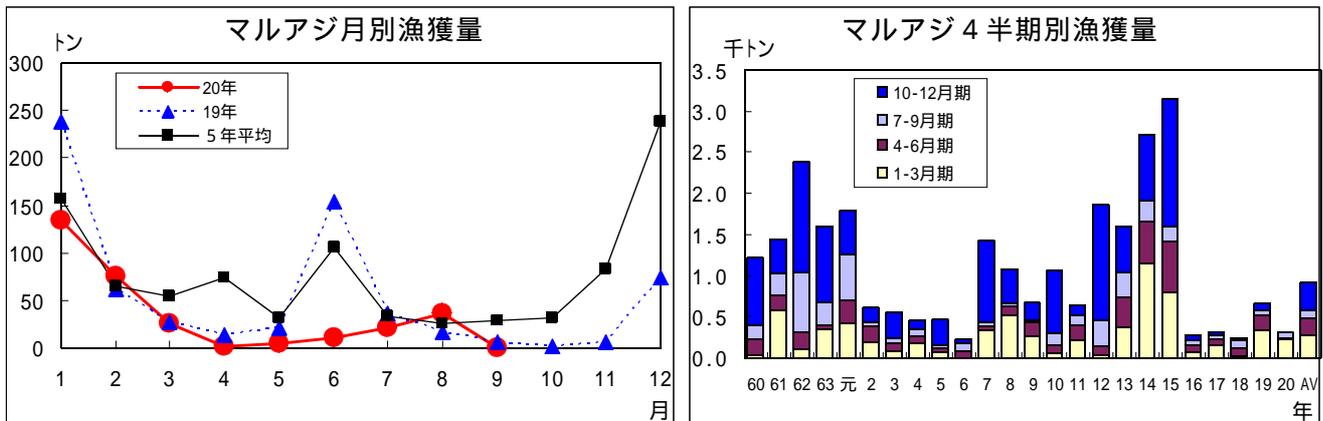


図 マルアジ (アオアジ) まき網漁獲量変化(4港計)

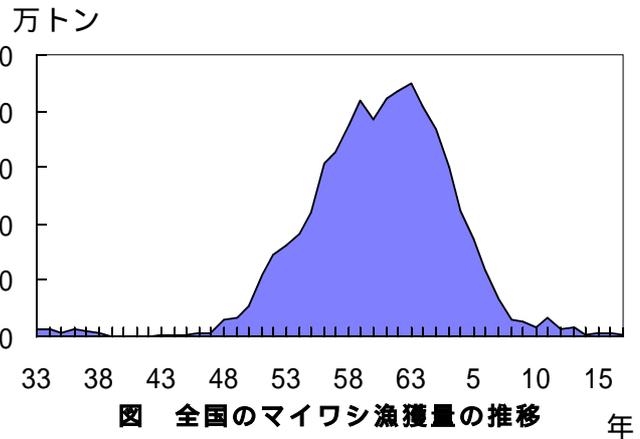
平年値は過去5年(平成15～19年)の平均値、9月は平成20年9月17日までの水揚げ量を使用。

# [マイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のマイワシの漁獲量は、昭和30年代から40年代にかけての不漁期の後、昭和48年頃から増加の傾向が見られ、昭和63年には449万トンまで増加しました。

しかし、平成元年から三陸沖を中心に漁獲量が減少し始め、その後もマイワシの若齢魚の減少等により、全国的に漁獲量は減少を続け、平成7年には66万トン、平成10年は16万7千トンとなりました。平成11年は35万1千トンとやや増加したものの、その後減少し平成18年は5万3千トンでした。



## 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

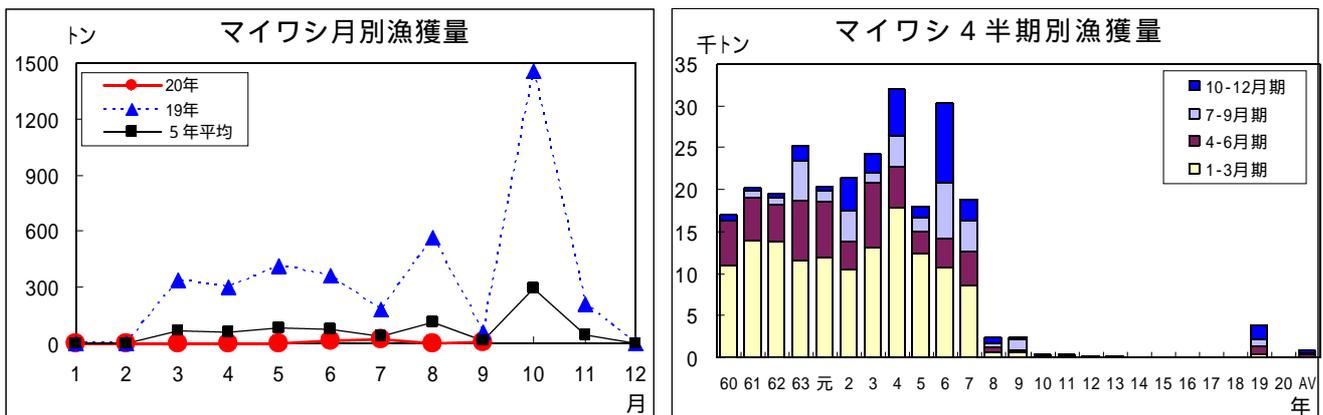
まとまった来遊は見られず、鹿児島県4港のまき網で29.7トン(前年比4%，平年比18%)と前年・平年とも大きく下回りました。北薩海域の棒受網でも3.8トン(前年比6%，平年比25%)と、前年・平年を大きく下回りました。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

散発的な来遊にとどまり、前年・平年を下回るでしょう。

(根拠)

マイワシ資源は全国的に依然として低水準にあり、また卵稚仔調査や近隣県の水揚状況より今期の漁獲主体となる0歳魚（平成20年生まれ）の加入量は少ないと考えられ、散発的な来遊にとどまると考えられます。



年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年9月17日までの水揚量を使用。

# [ウルメイワシ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

全国のウルメイワシの漁獲量は，昭和30年代後半から40年代前半にかけて3万トン前後で推移していましたが，昭和46年から54年まで5万トン前後で推移しました。昭和55年以降，漁獲量は減少し昭和60年には3万トンとなりましたが，その後，増減を繰り返しながら，増加傾向を示し，平成6年に6万8千トンとなりました。近年では再び減少傾向に転じ，平成12年は2万4千トン，平成18年は3万8千トンでした。

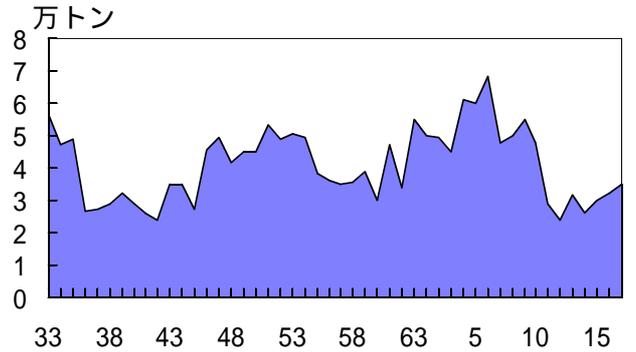


図 全国のウルメイワシ漁獲量の推移

## 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）】

鹿児島県4港のまき網で502.6トン（前年比30%，平年比99%）と，前年を下回り平年並みとなりました。北薩海域の棒受網では470.2トン（前年比57%，平年比84%）と，前年・平年を下回りました。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

まき網・北薩海域の棒受網とも中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となるでしょう。前年を下回り平年並みに推移するでしょう。

（根拠）

今期漁獲の主体となる0歳魚(平成20年生まれ)の7～9月期の漁模様より，来遊水準は平年並みと考えられます。

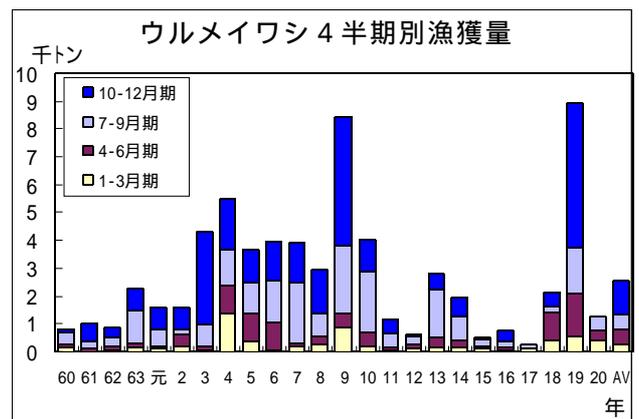
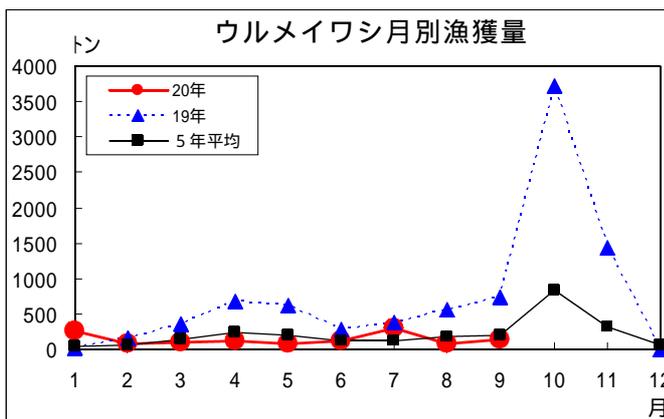


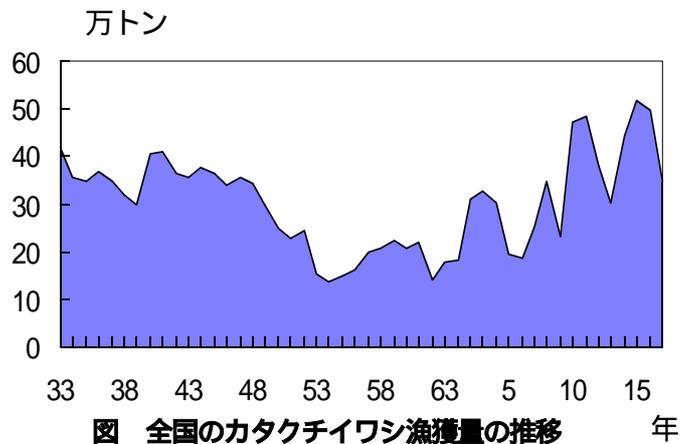
図 ウルメイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年9月17日までの水揚量を使用。

# [ カタクチイワシ ]

## 1. 漁獲量の動向（農林統計）

カタクチイワシの漁獲量は、昭和48年まで30万トン台で変動していましたが、昭和49年以降減少傾向となり昭和54年には13万トンとなりました。その後、徐々に漁獲量は増加し昭和59年には22万トンとなりましたが、昭和62年には再び14万トンまで減少しました。昭和63年以降は大きく増減を繰り返し、平成13年は30万トン、平成14年は44万トンでした。平成15年は過去最高の51万7千トンとなりましたが、その後再び減少し、平成18年は41万5千トンとなりました。



## 2. 平成20年7～9月期の漁況の経過

【4港計（阿久根；枕崎；山川；内之浦）のまき網及び棒受網】

鹿児島県4港のまき網で995.2トン（前年比158%，平年比432%）の水揚げで、前年・平年を大きく上回りました。北薩海域の棒受網では222.8トン（前年比58%，平年比120%）の水揚げで、前年を下回ったものの平年を上回りました。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)が漁獲の主体となり、前年・平年を上回るでしょう。  
（根拠）

北薩海域で中羽銘柄(0歳魚・平成20年生まれ)の来遊量が好調に推移しており、来遊水準は高いと考えられます。

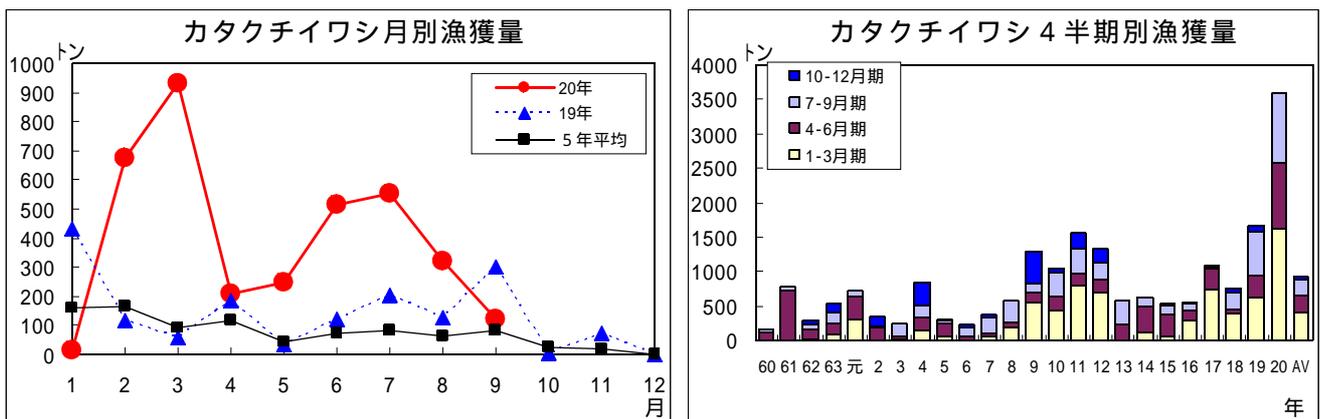


図 カタクチイワシまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，平成20年9月17日までの水揚量を使用。

# [シラス]

## 1. 経年経過

バッチ網漁業の漁獲量は、西薩海域では平成11年の5,450トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14, 15年と1,000トンを下回り低調に推移しました。その後平成16年は3,507トンと比較的好調に推移しましたが、平成17年以降減少傾向を示し、平成19年は2,470トンとなりました。

志布志湾海域では平成12年の1,407トン进行ピークに減少傾向を示し、平成14年は396トンまで減少しましたが、平成15年以降は増加傾向を示し、平成19年は2,374トンと好調に推移しました。

## 2. 平成20年7～8月期の漁況の経過

今期の西薩海域ではカタクチシラス主体に361.6トンの水揚げで、前年の469%、平年の163%と前年・平年を上回りました。志布志湾海域ではカタクチシラス主体に120.9トンの水揚げで、前年の206%、平年の75%と前年を上回ったものの平年を下回りました。

## 3. 平成20年10～12月期の見とおし

漁獲の主体は、カタクチシラスでしょう。来遊量は、西薩海域では前年・平年を上回り、志布志湾海域では前年・平年を下回るでしょう。

(根拠)

西薩海域・志布志湾海域とも秋漁と夏期の降水量との間に強い正の相関が見られます。今年の夏期の西薩地区での降水量は前年・平年を上回り、また北薩海域での産卵親魚となるカタクチイワシの漁獲量が好調のため、西薩海域では来遊水準は高いと思われます。今年の夏期の志布志湾周辺地区の降水量は前年・平年を下回り、また志布志湾周辺海域でのカタクチイワシの漁獲量が8月以降低調のため、志布志湾海域では来遊水準は低いと思われます。

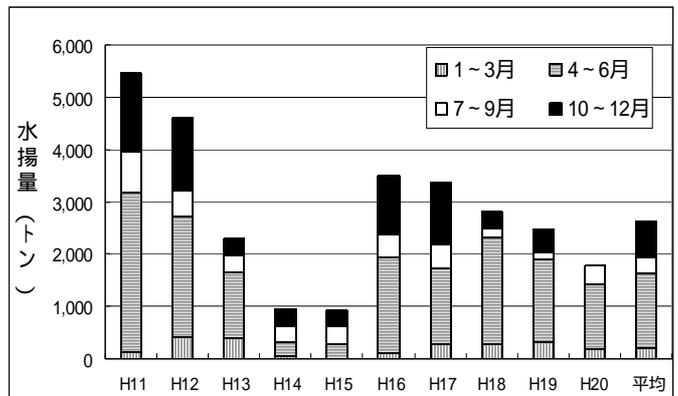
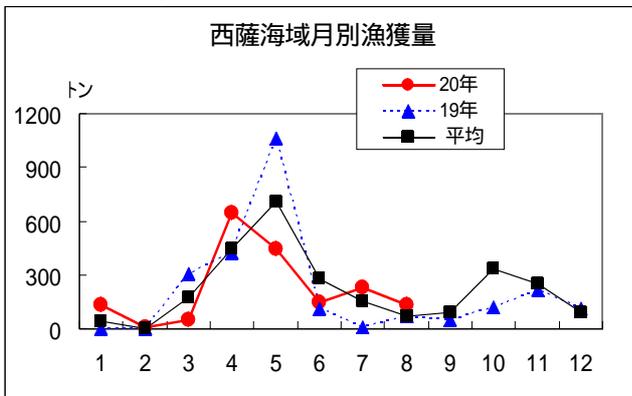


図 西薩海域バッチ網漁業の漁獲量変化(4漁協計)

平成20年8月末までの水揚量を使用。

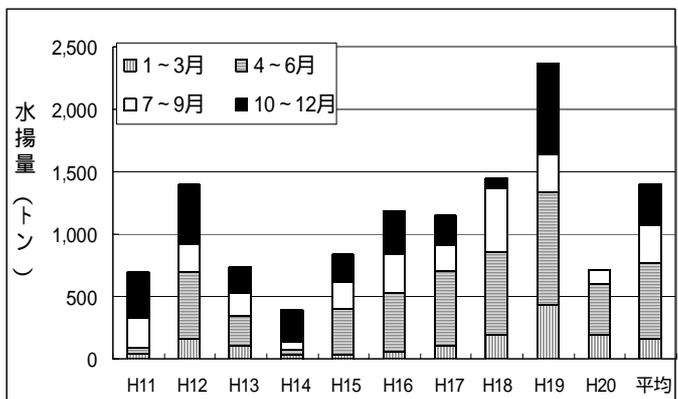
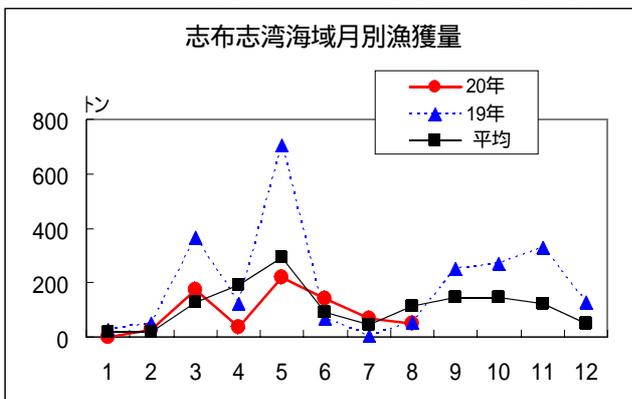


図 志布志湾海域バッチ網漁業の漁獲量変化(2漁協計)

平成20年8月末までの水揚量を使用。

[ イワシ類参考資料 ]

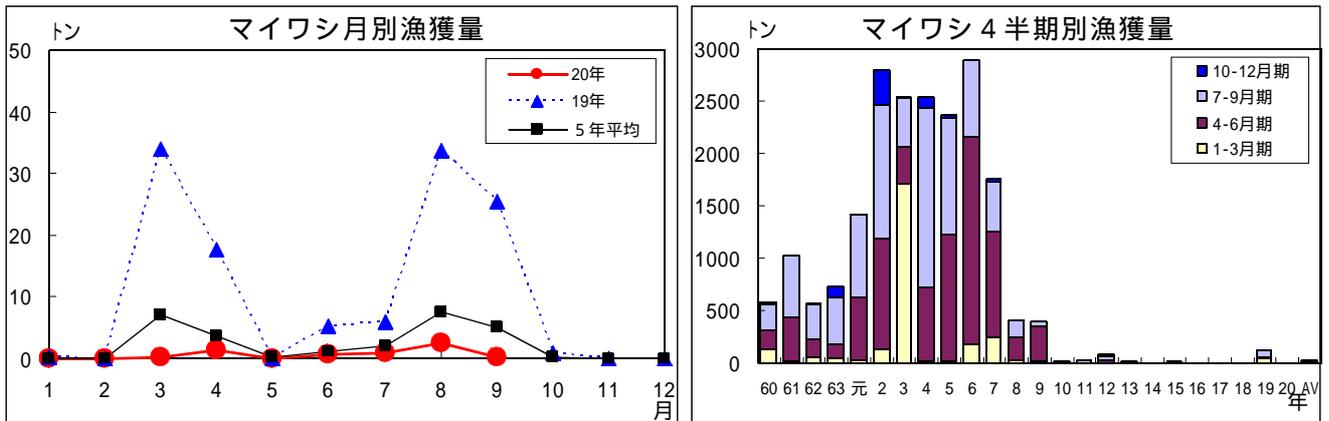


図 マイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

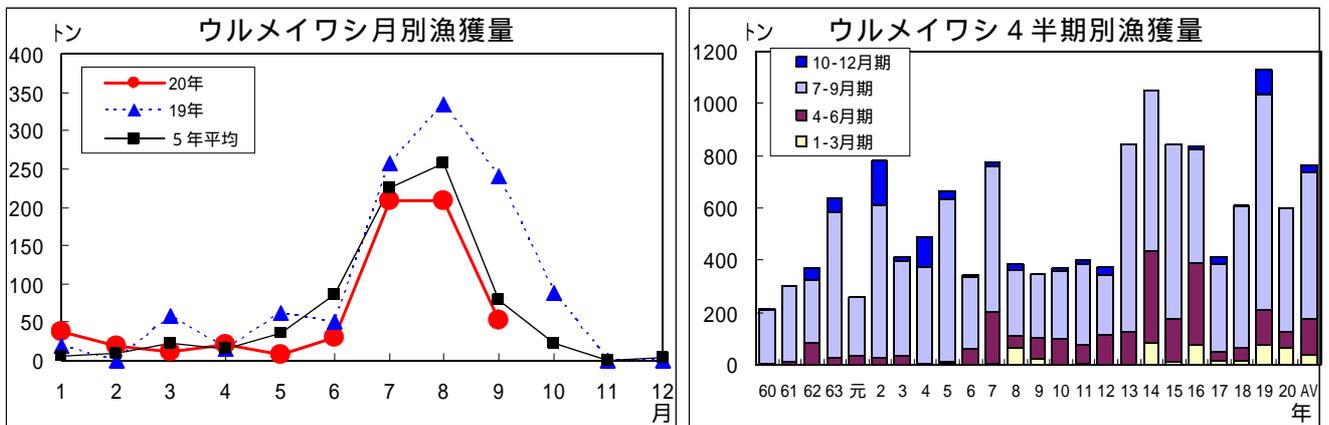


図 ウルメイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

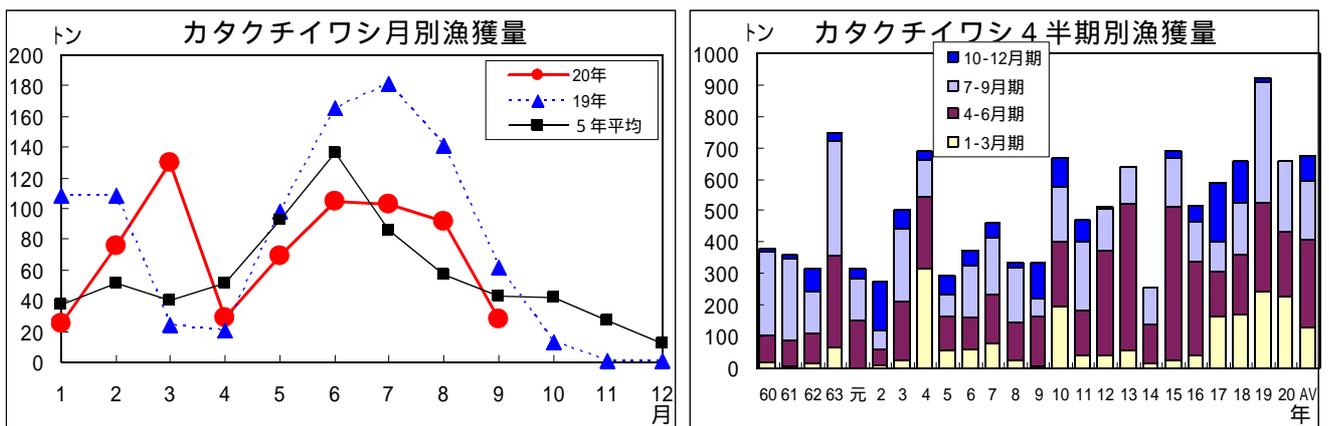


図 カタクチイワシ敷網漁獲量変化(阿久根港)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，9月は平成20年9月17日までの水揚量を使用。

## [ 参考：漁況経過のみ記載 ]

### ムロアジ類（クサヤモロ，モロ）（4港計）

#### 1. 経年変化及び平成20年7～9月期の漁況の経過

ムロアジ類の漁獲量は，平成2年の21,700トンピークに急減し，平成6年以降は，1,500トンから4,500トンの間での推移となっています。平成19年は18年より若干増加し2,655トンとなりました。

平成20年7～9月は，薩南海域でクサヤモロ（銀ムロ）主体の漁獲があり，期全体では274トンの水揚げで，前年の89%及び平年の76%でした。

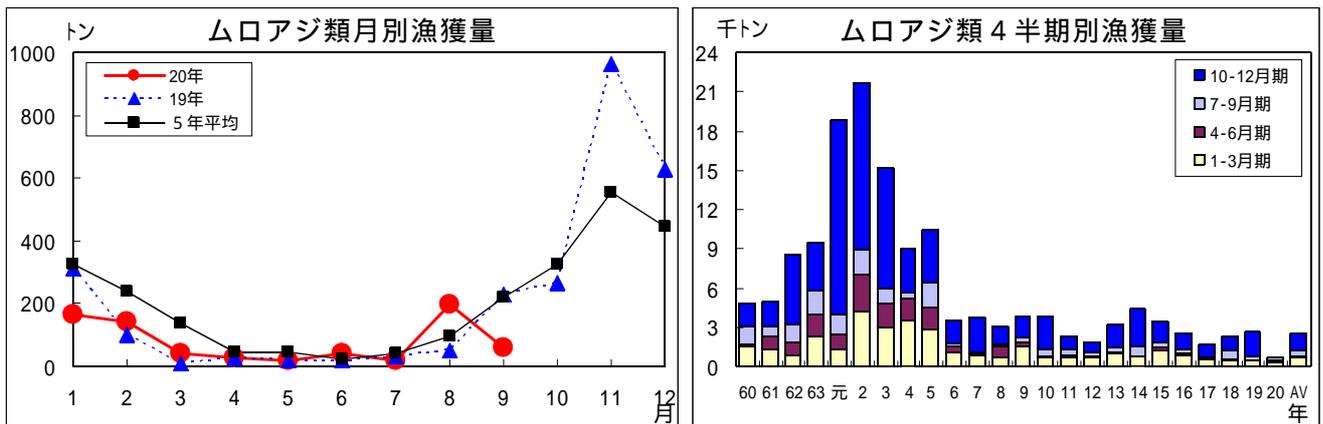


図 ムロアジ類まき網漁獲量変化(4港計)

### オアカムロ（4港計）

#### 1. 経年変化及び平成20年7～9月期の漁況の経過

オアカムロの漁獲量は，平成元年の5,300トンピークに一端減少し，平成7年に4,400トンと再度ピークを迎えた後は減少傾向となり，平成19年は昭和60年以降最低の714トンとなりました。

平成20年7～9月は，主に薩南海域で漁獲があり，期全体では399トンの水揚げで前年の152%及び平年の142%でした。

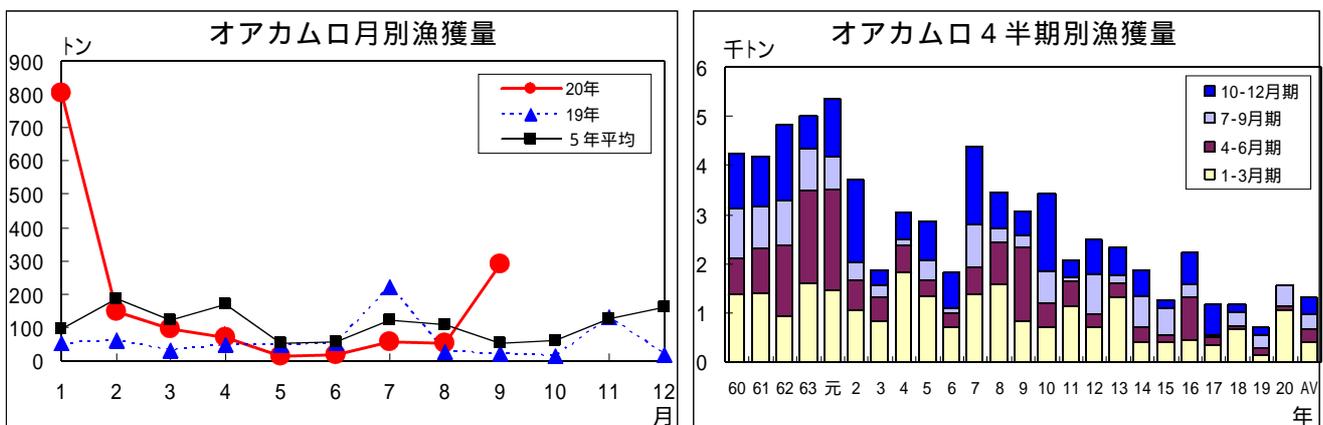


図 オアカムロまき網漁獲量変化(4港計)

平年値は過去5年（平成15～19年）の平均値，9月は平成20年9月17日までの水揚量を使用。